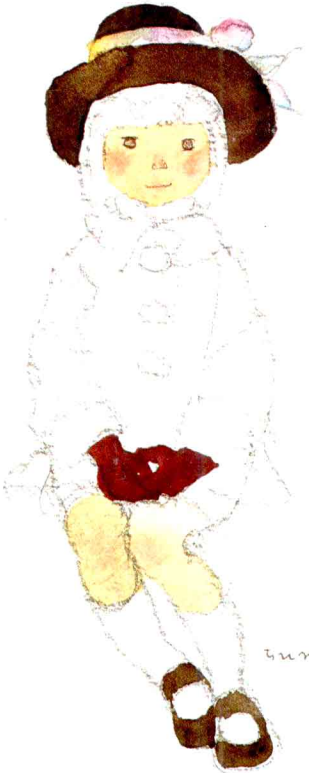
AOITORI BUNKO

講談社 青い鳥文庫

窓ぎわのトットちゃん

黒柳徹子

いわさきちひろ・絵



講談社 青い鳥文庫　155-1

窓ぎわのトットちゃん
黒柳徹子

1991年6月15日　第1刷発行
1996年5月9日　第17刷発行
（定価はカバーに表示してあります。）

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2—12—21　郵便番号112—01

電話　出版部（03）5395-3536
販売部（03）5395-3625
製作部（03）5395-3615

N.D.C. 916　358p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

© TETSUKO KUROYANAGI　1991

Printed in Japan

本書の無断複写（コピー）は著作権法上
での例外を除き，禁じられています。

ISBN4-06-147351-4　（児庫）

（落丁本・乱丁本は，講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。）

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

窓ぎわのトットちゃん

黒柳徹子／作　いわさきちひろ／絵

講談社 青い鳥文庫

この本を、亡き、小林宗作先生にささげます。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

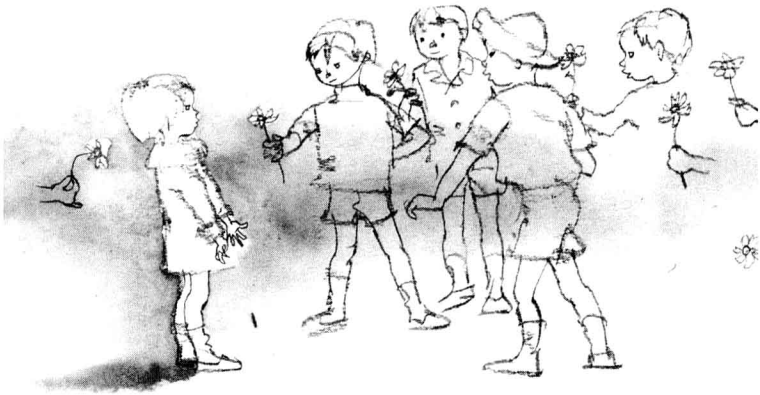
もくじ

はじめての駅　9
窓ぎわのトットちゃん　12
新しい学校　24
気に入ったわ　25
校長先生　29
お弁当　36
今日から学校に行く　39
電車の教室　43

授業 46
海のものと山のもの 51
よくかめよ 58
散歩 60
校歌 66
もどしとけよ 73
名前のこと 81
落語 83
電車がくる 85
プール 93
通信簿 98
夏休みがはじまった 100
大冒険 104
胆試し 112
練習所 117
温泉旅行 123
リトミック 130
一生のお願い！ 137
いちばんわるい洋服 143
高橋君 148
とびこんじゃダメ！ 153
「それからさあー。」 156

ふざけただけなんだ　164
運動会　169
小林一茶　179
とっても不思議！　181
手でお話　188
泉岳寺　190
マサオちゃーん　196
おさげ　200
サンキュー　207
図書室　211
しっぽ　215
二度めの春　221
白鳥の湖　224
畠の先生　229
はんごうすいさん　234
「ほんとうは、いい子なんだよ。」　243
お嫁さん　247
ボロ学校　250
リボン　255
お見舞い　260
元気の皮　265
英語の子　277

学芸会　282
はくぼく　287
泰明ちゃんが死んだ　291
スパイ　296
ヴァイオリン　302
約束　306
ロッキーが、いなくなった　312
茶話会　319
さよなら、さよなら　325
あとがき　328



●これは、第二次世界大戦が終わる、ちょっと前まで、実際に東京にあった小学校と、そこに、ほんとうに通っていた女の子のことを書いたお話です。

はじめての駅

自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手をひっぱって、改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切ににぎっていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。そこで、改札口のおじさんに、

「この切符、もらっちゃいけない？」

と聞いた。おじさんは、

「ダメだよ。」

というと、トットちゃんの手から、切符を取りあげた。トットちゃんは、改札口の箱にいっぱいたまっている切符をさして聞いた。

「これ、ぜんぶ、おじさんの？」

おじさんは、ほかの出て行く人の切符をひったくりながら答えた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

「おじさんのじゃないよ、駅のだから。」
「へーえ……。」
トットちゃんは、未練がましく、箱をのぞきこみながらいった。
「わたし、大人になったら、切符を売る人になろうと思うわ。」
おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。
「うちの男の子も、駅で働きたいって、いってるから、いっしょにやるといいよ。」
トットちゃんは、すこし離れて、おじさんを見た。おじさんはふとっていて、眼鏡をかけていて、よく見ると、やさしそうなところもあった。
「ふん……。」
トットちゃんは、手を腰にあてて、観察しながらいった。
「おじさんとこの子と、いっしょにやってもいいけど、考えとくわ。わたし、これから新しい学校に行くんで、いそがしいから。」
そういうと、トットちゃんは、待ってるママのところに走っていった。そして、こう叫んだ。
「わたし、切符屋さんになろうと思うんだ！」

ママは、おどろきもしないで、いった。

「でも、スパイになるっていってたのは、どうするの？」

トットちゃんは、ママに手をとられて歩き出しながら、考えた。（そうだわ。きのうまでは、絶対にスパイになろう、って決めてたのに。でも、いまの切符をいっぱい箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ。）

「そうだ!!」

トットちゃんは、いいことを思いついて、ママの顔をのぞきながら、大声をはりあげていった。

「ねえ、ほんとうはスパイなんだけど、切符屋さんなのは、どう？」

ママは答えなかった。ほんとうのことをいうと、ママはとても不安だったのだ。もし、これから行く小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。小さい花のついた、フェルトの帽子をかぶっている、ママのきれいな顔が、すこしまじめになった。そして、道をとびはねながら、なにかを早口でしゃべってるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったから、顔があうと、うれしそうに笑っていった。

「ねえ、わたし、やっぱり、どっちもやめて、チンドン屋さんになる!!」
ママは、多少、絶望的な気分でいった。
「さあ、おくれるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、おしゃべりしないで、前をむいて、歩いてちょうだい。」
二人の目の前に、小さい学校の門が見えてきた。

窓ぎわのトットちゃん

新しい学校の門をくぐる前に、トットちゃんのママが、なぜ不安なのかを説明すると、それはトットちゃんが、小学校一年なのにかかわらず、すでに学校を退学になったからだった。一年生で!!
つい先週のことだった。ママはトットちゃんの担任の先生に呼ばれて、はっきり、こういわれた。
「おたくのお嬢さんがいると、クラスじゅうの迷惑になります。よその学校にお連れくだ

さい！」

若くて美しい女の先生は、ため息をつきながら、くり返した。

「ほんとうにこまってるんです！」

ママはびっくりした。（いったい、どんなことを……。クラスじゅうの迷惑になる、どんなことを、あの子がするんだろうか……。）

先生は、カールしたまつ毛をパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻きの毛を手でなでながら説明にとりかかった。

「まず、授業中に、机のフタを、百ぺんくらい、開けたり閉めたりするんです。そこで私が、『用事がないのに、開けたり閉めたりしてはいけません。』と申しますと、おたくのお嬢さんは、ノートから、筆箱、教科書、ぜんぶを机の中にしまってしまって、ひとつひとつ取り出すんです。たとえば、書き取りをするとしますね。するとお嬢さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン！　とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭を中につっこんで筆箱から〝ア〟を書くための鉛筆を出すと、いそいで閉めて、〝ア〟を書きます。ところが、うまく書けなかったり、まちがえ

たりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭をつっこんで、消しゴムを出し、閉めると、いそいで消しゴムを使い、つぎに、すごい早さで開けて、消しゴムをしまって、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見てますと、〝ア〟ひとつだけ書いて、道具をひとつひとつ、ぜんぶしまうんです。鉛筆をしまい、閉めて、また開けてノートをしまい……というふうに。そして、つぎの〝イ〟のときに、また、ノートから始まって、鉛筆、消しゴム……そのたびに、私の目の前で、目まぐるしく、机のフタが開いたり閉まったり。私、目がまわるんです。でも、一応、用事があるんですから、『いけない。』とは申せませんけど……。」

先生のまつ毛が、そのときを思い出したように、パチパチと早くなった。

そこまで聞いて、ママには、トットちゃんが、なんで、学校の机を、そんなに開けたり閉めたりするのか、ちょっとわかった。というのは、はじめて学校に行って帰ってきた日に、トットちゃんが、ひどく興奮して、こうママに報告したことを思い出したからだった。

『ねえ、学校って、すごいの。家の机の引き出しは、こんなふうに、ひっぱるのだけど、学校のはフタが上にあがるの。ごみ箱のフタと同じなんだけど、もっとツルツルで、いろ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb